

2025.8.7 (木)
第6回例会
(通算3815回)

2025-2026 年度 釧路ロータリークラブ会報

会長スローガン「笑顔と誇りを胸に、挑戦するロータリー」

会 長 荒井 剛
副 会 長 池田 一己
幹 事 横田 英喜
編集責任者 クラブ会報・雑誌委員会

例会日 毎週木曜日 12:30 ~ 13:30 夜間例会 18:00
例会場 釧路センチュリーキャッスルホテル
事務局 釧路市錦町 5-3 三ッ輪ビル 2F
☎ 0154-24-0860 📠 0154-24-0411

2025-2026 年度
国際ロータリーテーマ

『よいことのために 手を取りあおう』
UNITE FOR GOOD

2025-2026 年度
RI 会長 フランチェスコ・アレツツォ
第 2500 地区ガバナー
佐渡 正幸 (釧路北 RC)

本日のプログラム 講師例会「地域社会教育と地域企業の可能性」(プログラム委員会)

次週例会 中学親善硬式野球大会報告例会 / カルガリー国際大会報告 (青少年奉仕委員会)

■ロータリーソング：奉仕の理想 ■ソングリーダー：田中 弘和君

■会員数 107 名

■ビジター

■ゲスト 北海道教育大学釧路校准教授 宮前 耕史様

会長の時間 荒井 剛会長



皆さん、こんにちは。「会長挨拶のテンションが低いのではないかと」のご指摘をいただきましたので、多少テンションを

上げて今日は話したいと思います。

『ロータリーの友』8月号でカルガリー国際大会が特集されております。私と横田幹事と八幡さんと実際にカルガリーに行っていました。8月21日の例会の後半部分で八幡さんにその報告をしていただきます。ぜひ、楽しみにしていただければと思います。

もうひとつ、先週末の8月2～3日に中学親善硬式野球大会が旧市民球場のウィンドヒルひがし北海道スタジアムで無事に執り行われました。開会式、閉会式、また試合を観戦していただきました皆さん、本当にありがとうございました。多くの会員の皆さまに来ていただきました。そして、その準備にあたっていただきました青少年奉仕委員会の岩田委員長をはじめ、皆さん、本当にありがとうございます。

この大会の報告は、8月21日の前半の例会であると思いますが、この野球大会に関連し嬉しかったことがありましたので、それを今日、話させていただきます。

最終的に決勝戦は、大空リトル対十勝帯広リトルの試合でした。最終回、3対3の同点になって、最後は

サヨナラで大空リトルが勝ったのです。何が嬉しかったか、です。そのサヨナラヒットを打った選手は、私がよく知っている選手だったのです。すぐく注目している選手です。

それが嬉しかったのですが、大空リトルなのになぜ知っているのかという話です。あとは、なぜ注目していたのかです。

彼は、もともと別海町に住んでいる子なのです。ご存知の方は釧路市内にある小学校の野球クラブで「ゴールデンモンキーズ」という道内でも強い、全国区にもなるスゴイ強いチームがあるのです。「その強いチームで野球をやりたい」と別海の家を離れて釧路に引っ越しをして釧路町の小学校に通っていたのです。私は釧路町なので、私の近くの小学校に通っていたのです。私の子供たちも野球をやっていたので、彼とは対戦チームとしていろいろやっていたことがあり、注目選手だったのです。

私は5～6年が経つのかな。毎朝、小学校の見守り活動をしていて、ウチの子は卒業しているのですが懲りずに今でも見守りをしているのです。先ほどの大空リトルでサヨナラヒットを打った子がウチの近くの小学校に通った時から見守り活動で挨拶をしていたのです。その子がサヨナラヒットを打ってくれて嬉しかったのです。

決勝戦と閉会式が終わりました。ロータリアンがメダルを持って優勝チームの選手それぞれにメダルを掛けて行きます。私がメダルを掛けることになったのが、まさにそのサヨナラヒットを打った選手だったので

す。僕は覚えているのですけれども、彼は覚えているのかなと思ってメダルを掛けた時に「覚えているか」と言ったら、「覚えています」と言ってくれたのです。これがホントに嬉しくてね。

だいぶ大きくなって、小学校の時の面影ではなくてたくましく、そのままプロに行けるのではないかくらいの、いいお尻をしたガタイのいいお兄ちゃんになっていたのですが、中三で今年が卒業で、その最後の年にこの大会でサヨナラヒットを打ってくれて、優勝を決めてくれた選手だったのです。

その方が、僕のことを覚えていてくれたことがとても嬉しかったという、自己満足の話でしたが、ロータリーの事業に関連したい話ということで話させていただきました。

本日もよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

幹事報告 横田 英喜幹事

8月になりましたのでロータリーレートが変わりました。149円となりますのでよろしくお願いいたします。

皆さんのメールアドレスに『ガバナー月信8月号』を送らせていただきました。見ていただいた方もいると思いますが、最後のページに「釧路市内のグルメ&ナイトスポット特集」で、瓢さんと、華蔵さん、レラさんの記事が載っていますのでご覧ください。データですのでショートカットがあって各ホームページまで飛ぶようになっています。紙とは違って、いい情報源になると思っています。

本日の例会終了後、第2回目の理事会を開催いたしますので理事の方はご参加をよろしくお願いいたします。

以上となります。

新入会員紹介

スポンサー 村上 祐二君

本日、ご入会となりました西田一博君を私からご紹介させていただきます。

会社は、有限会社厚岸清掃社の代



表取締役をされております。年齢は45年生まれですので間もなく55歳です。ご家族はまさみ様とお二人です。ゴルフはやります。ハンディは分かりません。マージャンはしません。趣味は登山とスキーです。登山は相当やります。ご存知の方が多いと思いますが、意外と知られていないのは「釧路ラーメン」は北海道遺産に登録されているのです。札幌、旭川、函館に釧路が加わっているのです。実は、この登録者が西田君なのです。「麺遊会」という団体があって、「らフェス

タ」というラーメンのお祭りをやっています。その麺遊会を作ったのも西田君。「らフェスタ」をやったのも西田君で、ラーメン業界では有名な方です。

それでは、西田君から自己紹介をお願いいたします。

私、久しぶりの登壇で緊張して忘れておりました。お酒は飲みます。大好きです。そして、推薦者は、杉村莊平君となっております。失礼しました。

新入会員

有限会社厚岸清掃社代表取締役 西田 一博君



皆さん、こんにちは。過分なる、想定外のご紹介をいただきましてありがとうございます。

隣町・厚岸町で廃棄物処理業をさせ

ていただいております有限会社厚岸清掃社の西田と申します。よろしくお願いいたします。

この度は、ご縁をいただきまして歴史と伝統ある釧路ロータリークラブに入会させていただくことを大変嬉しく、また大変光栄に思っております。会場内を見回すと若いころから大変お世話になっている多くの先輩の皆さまがいらっしゃいまして、大変緊張しております。

私も、あの当時は猪突猛進のような男でありましたが、現在は年を重ね少し心もおだやかになっておりましたので、今後は皆さまとまずは健康で豊かないい時間を過ごせますように努力してまいります。また、大変微力ではありますが、今後の釧路ロータリークラブ発展のためにも尽力してまいりますので、不慣れではございますがご指導を賜りますようお願いを申し上げます。簡単ではございますがご挨拶に代えさせていただきます。

いろいろお世話になります。どうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございます。

(荒井会長からロータリーグッズの贈呈)(拍手)

歓迎のご挨拶

荒井 剛会長

西田さん、入会おめでとうございます。アウトドアがお好きだということで、バードウォッチングを趣味にしている、趣味は違うかもしれませんが一日でも早くこのロータリークラブに馴染んでいただいて、皆さんと触れ合っていただければと思っております。ホントに雰囲気の良いクラブだと思っておりますので、ぜひ楽しんでいただければと思います。

西田さんの所属委員会は、クラブ会報・雑誌・公共イメージ委員会に所属していただこうと思っております。

す。委員長は八幡さん、よろしくお願いいたします。

ニコニコ献金 栗林 定正会員



ニコニコの枠を借りて、わがままながら告知をさせていただきます。商工会議所なのですが、昨年から「涼しい釧路を売ろう」といろいろ

運動を続けておりますけど、あさって土曜日に、読売テレビ「NEWS ジグザク」が昼 11 時 55 分から日本テレビ系列で報道されます。その中で「笑えるほど涼しい釧路」が全国ネットで報道されることになりました。

お時間のある方は一緒になって見て、応援いただければと思い、この時間をお借りしました。皆さん、応援をよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

■本日のプログラム■

講師例会「地域社会教育と地域企業の可能性」

プログラム委員会 藤井 敬亮委員長

プログラム委員会の藤井です。本日は「道東の地域教育をつくる会」を主宰して大学生・高校生、小中高大の各教員、教育行政や社会教育



団体、NPO職員などが参加して、対面とオンラインのハイブリットによる「地域教育創造フォーラム」を年に一度、これまで7回開催しています。地域教育の必要性を内外に呼びかける活動をしている大変忙しい先生です。

今回は、地域社会教育と地域企業がつながることによる可能性をお話いただきます。

それでは宮前先生、よろしくお願いいたします。

北海道教育大学釧路校准教授 宮前 耕史先生



高い所から失礼いたします。ただいまご紹介いただきました北海道教育大学釧路校で教員をやっております宮前といいます。

常日ごろは本学本校の教育研究活動に多大なるご支援とご理解をいただきましてありがとうございます。この中には、きっと学生がお世話になっている企業さ

んもいらっしゃると思います。

本日は地域社会教育と地域企業の可能性と銘打ちまして、子供たちの地域や社会における教育という活動に地域における地域の企業の皆さまの可能性について、ご存知の方もいらっしゃると思いますが「総合的な学習」の時間、高等学校では「探求の時間」と言いますが、そうした取り組みを中心に地域の企業の皆さまとの連携・協働の可能性を中心にお話をできればと考えております。

お手元に変細かい資料で恐縮ですが、ハンドアウトをお配りしておりますのでご参照いただければ幸いです。

簡単に自己紹介をさせていただきます。釧路出身ではなくて、群馬県出身となります。昭和 44 年生まれで 56 歳になります。専門は教育学部にいるのですが、日本民俗学という日本地域の地域社会の研究するのが本来の専門です。でも、学部自体は教育学部専攻となっています。海外経験などもあるのですが、短い期間ですが特別支援学校の高等部で現場の教員の経験もあり、平成 22 年 4 月に教育大に着任して、いま釧路で 15 年目となります。

地域文化研究室を担当しておりまして、教員養成課程にする地域文化研究室として地域や地域文化を研究するだけではなくて、その発展や課題解決、いま風に言うと持続可能性の実現になると思いますが、その課題に学校の中から、あるいは教育分野で貢献できる教育人材、これを私は「地域創造型教師」と呼んでいるのですが、そのような先生・教育人材を養成したいと考えております。

このような地域貢献を志向する学校を主張するのはまだ珍しいのもあるのですが、これからの時代は、そのような学校のあり方、先生のあり方がスタンダードになって来るものと考えて、いわゆる地域に根差した学校の先生を目指して教育研究活動を行っております。

本日のお話は、学校・教育を巡る政策動向について簡単にお話させていただければと思います。

簡単に言いますと、学校教育の目的が変わった、変わったというよりも改めて確認された・再定義されたということです。

どう変わったかということ、子供たちを持続可能な社会の作り手として育てようということです。それが持続可能性、持続可能な地域社会・未来の実現に貢献する、いわゆる地域創成とか地方創成を実現する学校を実現しようということです。

そのために、学校に関わっている方も多くいらっしゃると思いますが、「学校と地域の連携・協働が必要だ」「教育課程を社会に開く必要がある」「社会に開かれた教育課程が必要だ」と言われています。コミュニティ・スクールとか地域学校協同本部、地域

学校協同活動はそのための具体的な仕組み、施策だと思っています。

学校で言いますと、特別活動だとか総合的な学習の時間、生徒会活動とか運動会、学級活動もそうですが、これらを中心にしながら学習主体としての子供を中心にして、学校を核として人づくりと地域づくりの好循環を地域と学校の連携・協働で回して行くということです。私はこれを「地域創造型実践コミュニティ」と呼んでいるのです。そういう地域を実現して行こうというのが今の学校改革・教育改革の流れだと考えております。

それには、学校と地域の両方に必要なことがあります。それについても話させていただきます。それを踏まえて、釧路はどうかです。

その前に事例紹介として、私に関わらせていただいている十勝の浦幌町の「浦幌スタイル」の取り組みとか、東京の渋谷区の「シブヤ未来科」という総合学習を中心にした取り組み、近辺の事例として釧路町の「まちじゅう先生」とか、これは有名な方なのでご存じの方もいるかもしれませんが、「ラポールくしろ」です。取り組みについて時間の許す限り、お話をできればと考えております。

まず学校、教育をめぐる政策動向についてです。社会に開かれた教育課程のお話をさせていただきました。いまの学習指導要領は5年ぐらい前に変わっています。ほぼ10年に1回ぐらい変わるもので、今もすでに次の学習指導要領改訂に向けた議論が始まっていますけれども、大きくは変わらないと思います。

「社会に開かれた教育課程」が言われております。現行の指導要領が改訂される前に、これから学習指導要領をどう変えようかという時に、教育課程の理念について話し合った。それが社会に開かれた教育課程です。大事なところなので時間をかけて読んでみたいのです。皆さま、お読みになってどう考えなのかお考えいただければと思うのです。

① 社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、より良い学校教育を通じてより良い社会を作るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと。 ② これからの社会を作り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い、関わり合い、自分の人生を切り開いていくために求められる資質と能力とは何か。教育課程において明確化して育んでいくこと。 ③ 教育課程の実施にあたって地域の人的物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりして、学校教育を学校内に閉じずにその目指すところを社会と連携・協働しながら実現させること。

いかがでしょうか。私なんかは「当然でしょう」と思うのです。これが、学校がある存在意義というか、地域に根差す学校というものなことなのだと思います。

よく考えますと、なぜ、学習指導要領を変えようという時に、改めてこんなことを確認しなければいけなかったかです。国の中教審の教育課程部会の資料なのです。なぜ、こんな当たり前のことが確認されていなかったのか。これができていないという反省があったからだと思うのです。つまり、これと反対のことがその当時の学校教育で行われていたということです。

つまり、①の、社会や世界の状況を幅広く視野に入れていなかったです、ということです。より良い学校教育を通じてより良い社会を作るという目標を持っていなかった。忘れてしまったということだと思います。

②、これからの社会を作り出していく子供たち、子供たちが社会を作り出して行くということをすっかり忘れていました。その子供たちが社会や世界に向き合い、関わり合い、自分の人生を切り開いていく資質と能力とは何か。教育課程において明確化していませんでした。それを育もうともしていませんでした、ということです。それが実は「学校教育・学校内に閉じていた」と。これが10年ぐらい前までの学校教育の現実だろうと思います。

端的に言ってしまえば、学力向上。何のための学力、大学進学するため。それだけでいいのかという反省が加えられて、「いや、違うでしょ」と言われたのが、こういうことになるのです。

「社会に開かれる教育課程を作ろう」と、それに基づいて学習指導要領が改訂されるわけですけど、歴史上初めて「前文」が設けられました。そこで、改めてこんなこと言われたのです。

持続可能な社会の作り手を学校は作りましょう。そのために社会に開かれた教育課程を作りましょう、と言われたわけです。改めて学校というのは、持続可能な社会の作り手を育てる所であって、そのために教育課程を社会に開こうと改訂されて、いまの学習指導要領に基づく教育と教育改革が進んでいるところなのかなと思います。

私の感覚では、この学習指導要領を境に学校教育が180度変わったなと思います。つまり、何のための学校教育なのかが分からずに学校教育そのものが目的になっていました。でも、それはもうやめます。子供たちを持続可能な社会の作り手として育てることで持続可能な社会に貢献します。それがこれからの学校です。ということなのかなと考えております。

当時、文科省でこの施策に関わっていた志々田まなみさんがおられますが、「東日本大震災が転機だったのかな」と言っています。つまり、これが今「こういう学校を作ろう」、これが「コミュニティ・スクール」につながっているのです。地域とともにある学校づくり、学校は地域の課題を解決するための協働の場、地域づくりの核である、と。子供を中心に見据えて、学校と地域が連携・協働し、地域づくりの担い手を育てなさ

い。つまり、それを地域とともにある学校づくりと言うのだ。地域とともにある学校づくりを目指して関係者は教員を含めて当事者意識を持ちなさい。つまり、あなたたちも子供たちを持続可能な社会の作り手として育てることで、その実現に貢献する先生も持続可能な社会の作り手ですよ、と覚悟が求められているのだと思います。

それがいま、コミュニティ・スクールになっていて、学習指導要領改訂の大元になった中教審の3答申になるわけです。「協働答申」などと言われて、これをベースにしながら学習指導要領を改訂が行われたということです。

よくいうのが「教員養成改革」、「チーム学校」、もしかしたらお聞きになったかもしれません。それと「学校と地域の連携・協働」です。何のための学校と地域の連携・協働なのか。この答申の前は、地域の人たちが学校の教育活動に貢献するために、ということだったのです。

いや、違うのです。ここにはっきり書いてあります。「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けて学校と地域が連携・協働しなさい」と言っているのです。これ、私が言っているわけではなくて、中央教育審議会が言っている。これをしっかり認識をしなければならぬと学生にも言っております。

これが平成27年の12月だったのですが、平成28年の1月に当時の文科省の大臣の名前をとって「馳プラン」というプランが発表されます。いまの中教審の三つの答申がどんな構造になっているかを示しています。「次世代の学校・地域」の創生プラン（馳プラン）です。

細かくて見づらくて申し訳ありません。先ほどの「教員改革」「チーム学校」それと「学校と地域の連携・協働」はどんな構造になっているかを示していると私は読んでいるのです。

学校教育改革なので、真ん中にドンと「チーム学校」とありますが、教育改革です。社会に開かれた教育課程を作らなければならない。でも、それは何を指す



のかは、右上の部分です。地方創生、ここには「地域創生」とありますけども、持続可能な社会を作るために学校と地域が連携・協働するの

です。そのために社会に開かれた教育課程を作りなさい。学校と地域が連携・協働しなさい。そのためにコミュニティ・スクール（地域学校共同本部）という仕組みを作ります、ということです。

でも、それを知っている教員はまだまだ少ない。なので、教員養成改革を養成段階から進めましょうという

ことを考えております。

学習主体としての子供を真ん中に置いて、教育課程をしっかりと開き、学校と地域が連携・協働して持続可能な社会をともに作る学びを作る。これを「地域探求」とか「ふるさと学習」、「ふるさと教育」と言ったりします。その中軸になるのが「総合的な学習」の時間だったり「特別活動」という時間で、子供たちを持続可能な地域社会、未来の作り手として育てると同時に、学校を核として人を育てる、地域と地域のつながりを作る、こうして地域に人づくりと地域作りの好循環を作り、そして持続可能な地域社会・未来を実現していく。これが現行の学習指導要領、そして教育改革です。現在進行形の教育改革の核心かなと思います。法改正もどんどん進められていて、実現に向けて進んでおります。

というコミュニティを私は「地域創造型教師実践コミュニティ」と呼びたいと考えております。

理論的にはこのようになると思います。子供を真ん中に置いて、学校と地域が連携・協働して、地域をともに作り、学びをともに作っていく。その中で、それぞれにとっての持続可能な社会を作る、持続可能な社会の作り手としての当事者性を身に付けて行きます。こうして人づくりと地域づくりの好循環が創出されて行きます。

それが学校にとっては地域とともに学校作りとなり、地域にとっては学校を核とした地域作りとなります。これがコミュニティ・スクールとか地域と学校の協働活動の本質的な部分だと思います。

ただ、そこには条件があります。もうひとつ背景があります。子供たちが持続可能な社会の作り手として育つためには、本物の持続可能な社会の作り手に出会わなければダメです。つまり、学校の中に閉じこもっていても、そこには本物の持続可能な社会の作り手はいないのです。だから、どんどん地域に出て行かなきゃいけない。けれども、子供が地域に出て行ったとしても、そこに子供たちが出会うべき本物の持続可能な社会の作り手いなければどうしようもないことになります。

地域に子供たちが出会うべき地域の大人がいること、本物の持続可能な社会の作り手がいること。子供たちのあこがれ、ロールモデルとなるような地域の大人。皆さんだと思いますが。

それと、そのことを学校の先生が知っていることが大事です。だから、学校の先生は地域を知らなければならない。地域に出ないと、学校の先生が知らなければ子供たちに出会わそうとも思えないわけですから。ですから先生は地域を知らなければいけない、地域の人と出会わなければならないのです。

学校・地域の連携・協働、社会に開かれた教育課程の意義を正しく理解して、子供たちを本物の学校の外に

いる持続可能な社会の作り手としての皆さまと会わせたいと思えるような学校の先生が必要です。私が育てている「地域創造型教師」というのは、そういう先生なのです。だから、私の学生は学校の中に閉じこもっていないで、どんどん地域に出て、地域の方たちと一緒に何かを作る活動をしながら、将来、学校の現場に出た時に「あの人に会わせたい」と思えるような学校の先生になってくれたらと思っています。

例えば、浦幌町では「浦幌スタイル」という有名な取り組みがあります。人口が4000人を切った所です。15年くらい前からこの取り組みをやっているのですが、人口は毎年100人くらいずつ減っているのです。かつては小学校22校、中学校は16校あったのですが、今は2校ずつです。そこでコミュニティ・スクールを作っています。高校はありません。浦幌高校がありましたが、なくなっています。その高校がなくなってしまったことが浦幌自体の独特な取り組みになったそうです。

時間がありませんので、多少飛ばさせていただきます。全国的なモデルになって文科省のパンフレットに載ったり、今はこども家庭庁が注目をして「プレゼンにきなさい」と言うそうです。

簡単に言いますと、学校の総合学習を中心にしたふるさと教育、子供たちに地域に対する愛着を育てるといふ学校の取り組みに、地域づくりとして人づくりの学校の教育課程で行っているのです。そこに地域の大人たちが協力しています。

例えば、どっぷり地域に浸らせる体験などをするわけですね。川遊びとかソリ遊び、森林学習、農業体験、地元の農林漁業のお宅にホームステイさせることをやっています。そうして地域には尊敬すべき人がいることを子供たちが知っていくのです。中学校になると、そういう地域に対する想いを地域に対して育んだ愛着を基にして、「私たちはこんな地域を作りたい」ということを総合学習の時間に発表します。

こんな地域になってほしいと発表することは割とどこでもやっているのですが、浦幌町では、発表だけではなくそれを大人たちが実現する所でやっています。このように集まって、「子供の想い実現ワークショップ」と言います。例えば、どんなものが実現されたか、街キャラクタ『ウラハ・ホロマ』とか、地元の食材を使った食べ物の「お弁当」、化粧品、ゲストハウス、子供たちが集まっていろいろできる複合施設、浦幌マラソンなど中学生が総合学習の時間に「こんなことをやったらいいのではないかと提案したら、大人たちが実現してしまっているのです。

そうして子供たちには地域に対する愛着が育まれ、地域の大人に対する愛着・信頼が育まれて、人口減少が続いたままで4000人を切っていますが、20歳代・30歳代では転入が超過する現象が起きています。そ

れを進めているのが「十勝うらほろ楽舎」、元々はPTAでした。PTAから教育委員会、町を巻き込んでNPOを作り、いまは十勝うらほろ楽舎という社団法人になっています。

こういう話をすると「それは、田舎だからできるでしょ」とよく言われるのです。渋谷区でも全く同じことを総合的な学習の時間を中心に行っています。学校に行く子供たちが教科学習するのは午前中だけです。午後は地域の企業の方に学校に来ていただいて、あるいは地域の企業の方と一緒に学校の外でプロジェクトをするのを昨年からやっていて、これをインターネットで見ることができますのでぜひご覧になっていただきたいです。企業がいろいろ協力しています。大都会らしい企業が並んでいますけど、伴走型、協働プロジェクト型、リソース提供型、出前授業型、といういろいろあるようです。

「魅力ある街づくり」「お土産を作ろう」「プログラミング」とか、いろいろとやっています。ここでは、教育委員会とPTAが母体となって作った「一般社団法人シブタン」が学校に協力をしています。

同じようなことが釧路町でも、「まちじゅう先生」を教育委員会社会教育課の取り組みです。ホームページでご覧ください。イオンの周辺の企業45社の協力を得てやっています。

街づくりは人づくり、学校と地域、今日の場合は地域企業となります。連携・協働して町を作る人を作る、それこそが教育ということです。そのことで人づくり地域づくりの好循環が創出されます。そのためには子供・若者たちが早期に地域や地域の方々、信頼できる地域の大人、憧れの存在、ロールモデルとの出会いが必要です。そこに学校と地域の連携・協働の可能性があるのでないかと思います。

さらに釧路では、そのための仕組みがあるかどうか、今のところ、ちょっとない。というのが現状なのかと思います。あるいは、それが必要なのか、必要でないのかを考える必要があると考えております。

そのような地域の大人。自分が大切にされなかった地域の子供たちが地域に帰る訳ないと思うのです。いかに早い段階で子供たちを地域で受け止めて、学校と一緒に育てていく大人がいること、そういう仕組みがあることが大事なことでと考えております。

まとまらないお話となりましたけど、以上で私の話を終わらせていただきます。

ありがとうございました。

謝辞

荒井 剛会長

宮前様、本当にありがとうございました。

浦幌の話は、私が小学校・中学校のPTA会長をやっていたこともあって、ある会合で浦幌の取り組みの話

を聞いて、浦幌の若者が戻って来る、浦幌の若者の世帯が戻って来る。なぜ戻って来るのか。「浦幌が好きだから」という話がそこで出たのです。

それはよく聞く話であって、ホントに若い時から、小さい時から地元を愛する、地元こんないいことがあるという教育を受けていたからこそ、浦幌の子供たちが戻って来た、という話を聞いていました。

私は釧路町なので、うちの子が通っていた中学校も今日の話にあった取り組みなどを積極的にやっているところがあります。特にいま日本の人口、若者の人口が減っている時代ですので、子供に対する教育、子供がいかに地元を好きになって、どうやって地元の町づくりをするかというマインドを小さいころから植え付けることがとても大事だと思いました。

そういう方向に教育が向かっているんだと、専門分野ではなかったこともあり、そこを改めて認識させていただきました。今日は、そういう気づきをいただいた貴重な講演でした。

本日は誠にありがとうございました。

本日のニコニコ献金

■栗林 定正君 商工会議所 100 周年に伴う PR「涼しいくしろ」ニュースジグザグにて放映されます。

今年度累計 61,000 円